

今村和彦作 「新生」

- 効果音 (喫茶店内のガヤ、BGM)
- 今村和彦 (大声で) そうかよ。そうだったのかよ。どうせほかに好きな男でもできたんだろ。
- 順子 (小声で) わたしたち、もう会わない方がいいと思うの。
- 和彦 なんだよ。おれは一体君のなんだったんだ？
- 順子 わたし、用があるから帰るわ。さようなら。
- 和彦 おい、ちょっと待てよ。待てよったら、おい。(順子の腕をつかむ)
- 順子 (きっぱりと) 離してよ！ 皆 見てるじゃないの。じゃあね。もう電話しないで。
- ナレーション 今村和彦は、東京のある私立高校の2年生。高2にもなってガールフレンドの一人もいないのはカッコ悪いと、あるカワイ子ちゃんに目をつけたのですが、お聴きのとおり、顔が悪かったのか、態度が悪かったのか、それとも運が悪かったのか、とにかくあっさりとフラれてしまいました。
- 和彦(モノローグ) あ～あ、胸クソ悪^{わる}。大体、なんだよあの女！ 「もう電話しないで。さようなら。」ふざけんじゃねえ。「ちょっとかわいいからって、つけ上がるな」ってんだよ。美人も一皮むけば、ただの肉。あんな冷たい女、こっちからご免こうむる。おれはフラれたんじゃない、おれがフツたんだ。クソつたれ！
- ナレーション こう口の中でもぐもぐつぶやくと。彼はその喫茶店を出て、気晴らしにとパチンコをやったり、ゲームセンターに入ったりしては、むなしくお金を費やし、夜の町を独り放浪していました。幸福そうなアベックの姿を見るにつけ、殴りかかりたくなる衝動を抑えるので、かえって気は滅入るばかり。…その時です。
- 矢崎 こんばんは。これからすぐ近くの教カで、聖書のお話があるんですけど、ぜひいらしてください。
- ナレーション ——と、一枚のピラを受け取りました。
- 和彦(モノローグ) 聖書？ なんだ、キリスト教か。世の中には愛もへったくれもないの。…でもちょっと待てよ。むしゃくしゃするから、一丁からかってやるか。大体クリスチャンなんてのは、青っちょろくて、聖人ぶっていて気に入らん。おれが行って、そのありもしないものをありがたがっている妄想を打ち砕いてやろう。
- ナレーション そう一人つぶやくと、彼はその足で初めて教会の門をくぐりました。と言うより、「肩で風を切って乗り込んだ」と言った方がいいでしょう。やがて牧師の話が始まりました。
- 効果音 (背後で牧師の声)
- 和彦(モノローグ) なーんて粗末な薄暗い教会なんだ。こんな所にうづくまるようにしてアーメンソーメンやってくるから、みんな青っちょろくなってしまうんだ。
- 牧師 (FI)…イエス・キリストはあなたを愛しておられます。(FO)
- 和彦(モノローグ) 何？！ キリストなんてのは、2000 年も前の男じゃないか。そんな話よりも、おれは今、あの女がおれを愛してると言ってほしいね。全くあの女、どういうつもりなんだ？ チクショー、クソつたれ。あ～あ、こんな息の詰まるようなところに来るんじゃないかな。早く終わんないかな。
- ナレーション そうしているうちに、牧師の話が終わり、一人の若い女の人が前に出て、賛美歌を独唱した

のですが、その時の彼女の喜びに満ちた顔、限りなく澄んで輝いている美しい声に彼は目をみはりました。

和彦(モノローグ) 何があんなにうれしいんだろう？ 決して美人じゃないけど、今まであんな心の底から喜んでいるような笑顔を見たことがない…。

ナレーション やがて集会が終わり、彼が独りポツンと座っていると、一人の若い男の人がニコニコしながら話しかけてきました。

普喜 やあ、よく来たね。

和彦(モノローグ) チェ、思ったより青っちょろくないなあ。

普喜 教会は初めてかい？

和彦 ええ、まあ…。

普喜 聖書を読んだことはあるかい？

和彦 いいえ。家には前にもらったやつがありますけれど。

普喜 一度じっくりと読んでみるといい。今まで、この聖書ほど多くの人の人生を変えた書物はないからね。聖書にはね、「君は罪びとだ」って書いてあるんだよ。

ナレーション 和彦は、初対面の人に「君は罪びとだ」と言われたので、度肝を抜かれました。今までそんなことを面と向かって言われたことはありませんでしたから。

和彦 僕が罪びと？ 一体僕が何をしたというんですか？ あなたは一体何を根拠にそんな失礼なことを言えるんですか？ 僕を罪びとだなんて決めつけるあなたは、そもそも一体なんなのですか？

普喜 僕？ うん、僕も罪びとさ。聖書にはね、(聖書を開く音)ほら、ここを読んでごらん。

和彦 「また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、…』」(マルコの福音書 7:20-22)

普喜 これが聖書の言う罪のリストなんだ。この中の一つでも、君の心の中に浮かんだこともないものがあるかい？

和彦 悪い考え、不品行、盗み…。そんなこと言ったら、みんな罪びとになっちゃうじゃないか。そりゃ盗もうと思ったことぐらいありますよ。でもそこを理性でぐっと抑えるのが人間のすべきことじゃないですか。勝手に罪を定義しておいて、人を罪びとだと決めつけるのは、横暴だと思いたがね。

普喜 そうかな。でも聖書には、「罪から来る報酬は死である」とあるから、罪のことを考えないわけにはいかないんだ。

ナレーション 和彦と話したのは、普喜さんという人でした。和彦はなんとかやっつけてやろうと、いちいちかみ付いたのですが、普喜さんは、「聖書にはこう書いてある」としか答えませんでした。それで和彦は、彼をやっつけるためには、聖書をやっつけなければならないことを薄々感じました。

普喜 それじゃ、約束してくれるね、聖書を読んでみてくれるって。来週また話そう。

和彦 はあ。それじゃもう帰ります。頭が痛くなりました。

普喜 ごめんね。聖書を読むと直るよ、きっと。

和彦 てやんでえ。ないだ、聖書、聖書」って。でも、聖書のことを話す時のあの人の目はヤケに輝いていたな。そして、あの歌を歌った女の人の目も。順子が今日おれに見せた死んだ

ような目とはまるで違う。何か、おれの今まで知らなかった世界があるのかもしれない…。

ナレーション

それから1週間、彼は、女の子にフラれたショックも手伝ってか、むさぼるように聖書を読んできました。最初はどうも取りつきにくかった聖書の言葉も、次第に彼の心の中に突き刺さるようになりました。

和彦

(聖書を読む)『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。』(マタイの福音書 5:27-28)

和彦(モノローグ)

一体聖書はなんてムチャなことを言ってるんだ！ こんなこと言ったら、男はみんな地獄に行くじゃないか！

和彦

(聖書を読む)「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネの福音書 14:6)

和彦(モノローグ)

自分のことを“道であり、真理であり、命だ”…なんて、よっぽどうぬぼれたペテン師か、そうじゃなかったら、本当にそうなのか…。どっちかじゃなきゃ言えない言葉だなあ。

ナレーション

聖書の一つ一つの言葉に強い反発を感じながらも、彼は、その背後に何か自分を越えた大きな存在があることを薄々ながら感じ取っていきました。聖書の中では、それは“神”とも“父”とも呼ばれているようでしたが、彼は、神なんていうのは人間がつくり上げたものだと信じ込んでいましたから、どうしても信じられませんでした。そして次の日曜日、彼は疑問をたくさん抱えて教会に行きました。

普喜

やあ、よく来たね。来ると思ってたよ。

和彦

分からないことがたくさんあるんですけど。まず第1に、神がいるなんてどうして分かるんですか？ 神なんてのは、人間が自分の弱さを慰めるために、でっち上げたものじゃないですか？

ナレーション

こんな質問にも、普喜さんはイヤな顔一つせずに、聖書の中から、一つ一つその答えを引き出して来て彼に示しました。

普喜

君は今“神なんかいない”という前提で話しているだろ。もし神様が本当にいて、君が知らないだけだとしたら、君の態度は正しくないと思うんだ。“コペルニクスの転回”って知ってるかい？ 昔、人間は自分の周りを太陽が回っているものだと思込んでいた。実際そう見えるからね。でも本当は、地球が太陽の周りを回っていたんだ。それに気がつくためには、“もし地球が太陽の周りを回っているんだとしたら…”という発想が必要なんだよね。神様も同じで、“いない”と決めつけたら、絶対の本当のことは分からないよ。

和彦

(つぶやくように)もし…、神様がいたら…、か。

普喜

(確信を持って)神様のことは、この聖書に書いてある。なぜなら聖書は、神の人間へのメッセージだから。

ナレーション

普喜さんの言った“コペルニクスの転回”という言葉は、和彦の胸を打ちました。それから彼は、毎週教会に行くようになりました。神が本当にいるかないか、確かめてやろうと思ったからです。ある日、彼は教会で普喜さんに尋ねました。

和彦

あなたは、一体なんのために、だれのために生きているのですか？

ナレーション

彼は当然、「もちろん自分の幸福のためです。神様がそれを守ってくださるのです」というような答えを期待していました。しかし普喜さんは――。

普喜 そうだなあ。神様のため、僕の生き方を通してイエス・キリストに栄光を帰すためかなあ。

和彦(モノローグ)(エコー)この人は、イエス・キリストに命をかけている。一体、イエス・キリストっていうのは、
どういふ人なんだろう？ なんでこの人は「キリスト、キリスト」って言うんだろう？

ナレーション その時以来、彼はイエス・キリストに興味を持つようになりました。そして、家で独り聖書の中
中の「ローマ人への手紙」を読んでいると――

和彦 (聖書を読む)「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、
進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリスト
が私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかに
しておられます。」(ローマ人への手紙 5:7-8)

和彦(モノローグ)キリストが、私たちのために死んでくださった？ (ひらめいたように)そうか、それを“神の愛”
と言っているのか！ おれは、もうフラれちゃったけど、あの女を愛していると思っていた。で
も、おれはとてもしゃないが、あの女のためには死ねない。おれはただ彼女を、これの心の
空白を満たす道具のようにしか考えていなかったんじゃないか？ おれが彼女を愛している
と思ったのは、おれが自分を愛していることの裏返しだったんだ。あ～あ、おれってなんて
粗末な男なんだろう。おれは、フラれてあの女ばかり責めて悪者にしていたけど、本当はお
れが悪かったのかもしれない。

ナレーション 彼は、初めて“罪”ということを考えるようになりました。それまで自分は、そんなに悪いこと
はしていないと自負していたのですが、いざ聖書に照らして自分の心の中をのぞいてみる
と、出るわ出るわ、自分の中から過去の数々の悪い思い出がよみがえってきました。その
時、彼は最初に普喜さんに「君は罪びとだ」と言われた意味が、やっと分かったような気が
したのです。

和彦(モノローグ)「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中から
よみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」(ローマ人への手紙
10:9)キリストがおれの罪のために、あの十字架の上で死んだ。そしてよみがえった。…キリ
ストは死に勝った。普喜さんが言っていた罪の最大の報いである“死の力”を破られたといふこ
とは――、そうか！ キリストの十字架と復活を信じれば、おれも、こんなおれでも罪を赦さ
れるといふことか。そうだったのか！ 神様、イエス様、あなたを信じます。どうしようもない
僕を助けてください！

ナレーション 和彦にとって、それは、キリストにある新しい命の始まりでした。それから間もなく受けたバ
プテスマの時の彼のあかしをお聴きください。

和彦 17 歳での決断。ある人は「早すぎる」と言うかもしれませんが。でも僕は後悔はしない。なぜな
ら、僕は“イエス・キリスト”という巨大な船に乗って、“聖書”という舵かじをしっかりと両手に握り、
時には美しく、時には荒れ狂うように、眼前に広がる大海原にもう乗り出したのですから。
“その船は、絶対に沈没することがない”という確信のもとに――。

<完>